

No.2 「滑稽を語る」

彦阪義久（加古川市在住）

俳句は童にさせよ・・・

俳句の先達がこう述べたのは、童の感性に驚きと感動をまざまざと見せ付けられたのではないのでしょうか。

いわゆる大人達がこれらを日々の生活の中で失ってゆく現実があるのも事実です。

俳句発祥の時代とは比較にもならない程複雑で、多くの益々日常の営みに、それらの感覚を働かせることを忘れざるをえない状況にあることも事実です。それ故、滑稽というものがこの時代にまた光が当たってしかるべきことなのではとも考えます。

滑稽とは、古代中国では尋常ならざる弁舌のパフォーマンスであったとあります。私は俳句はある意味、言葉のパフォーマンスであると考えています。滑稽俳句とは、尋常ならざる言の葉でのパフォーマンスでもあるのではないのでしょうか。

先ほどの大人が忘れた、捨ててしまった童の尋常ならざる発想、感動を復活、思い返すことが滑稽俳句に繋がるのであると考えています。学問的な俳句、家元的な俳句をされてきた俳人たちは、格好や体裁を考えるあまり、この感動の根源をややも見逃して来たのも事実だと思います。

今、俳句人口は数パーセントの、それを職業とされている方を除き九十数パーセントの人々は遊びで俳句をされているのだと思います。

それ故、もっと楽しく滑稽を自ら詠み、人様の滑稽俳句を鑑賞し、家元流でない素人流の楽しみを持てばいいのだと思います。